

地方大学における地域志向科目の実践と学習者の事前知識 —松山東雲女子大学の「まつやま学」の事例から—

Region-Oriented subjects at Regional University and Student's Prior Knowledge of the Region:
Case Study of Matsuyama Studies

西村 浩子・山口 真美

Hiroko NISHIMURA, Manami YAMAGUCHI

(心理子ども学科子ども専攻)

要 約

松山東雲女子大学・短期大学では、大学が存立する地域（愛媛県松山圏域）について学ぶ学科共通科目として「まつやま学」を開講している。本科目では、松山市役所をはじめとする地域企業・団体・学識経験者と連携しながら、地域の社会・経済・文化・暮らしなど、地域社会で生きる基盤となる知識とその現状と課題を学ぶことにより、当事者意識を育むことを目標としている。

本論文では、本科目設置の経緯と授業の計画・運営状況について述べたのち、2023年度受講生へのアンケート調査結果から学生の地域社会に対するイメージと意識について明らかにする。

キーワード：地域志向、地域協働教育、まつやま、テキストマイニング

[Abstract]

Matsuyama Shinonome College and Junior College provides education that responds to the characteristics of the region. In this paper, we introduce one of them, Matsuyama Studies. Students in this subject learn about the society, economy, culture and lifestyle of the Matsuyama area —Matsuyama, where the college is located, and its surrounding cities of Iyo, Toon, Kumakogen, Masaki, and Tobe. The subject is intended to develop a sense of ownership among the students by learning about studying them and their challenges from people who work at Matsuyama City Hall and local companies and organization.

This paper describes the background of Matsuyama Studies and its present contents. Then, on a questionnaire survey of the students in 2023, we discuss what kind of image and views of the region the students have before studying.

Keywords: region-oriented, local collaborative education, Matsuyama area, text mining

1. 「まつやま学」開講の経緯と授業概要

1. 1. 開講の経緯

本論文の目的は、「まつやま学」設置の経緯と授業の計画・運営状況について記述することと、受講生へのアンケート調査結果から学生の地域社会に対するイメージと意識について明らかにすることである⁽¹⁾。

「まつやま学」は、松山東雲女子大学における「共通カリキュラム」の正課科目である。「共通カリキュラム」とは、2015年度～2019年度にかけてのCOC+（「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」責任校：愛媛大学）に参加大学として取り組んだ「地域協働教育」の成果⁽²⁾を踏まえ、2018年度に教育課程の見直しを行って、2019年度から新設された科目群である。

当時の塩崎千枝子学長からの提案により、愛媛の女子教育の拠点となるべく、地域や学園内の短期大学とも連携しながら、人的・物的両面の教育資源を最大限に活用する体制を整える一環として、教育課程の整備が進められた。

共通カリキュラムは、「知の礎」「社会とともに学ぶ」「ライフデザイン」「伝え合う力」の四つの科目群で構成され、本科目（「まつやま学」）は、「社会とともに学ぶ」の科目群の新設科目として配置された。そして、大学のある松山市と近隣5市町（伊予市、東温市、久万高原町、松前町、砥部町）を含める松山圏域について取り扱うことにして「まつやま」をひらがな書きとした。

「社会と共に学ぶ」科目群は、「①松山、日本という固有の地域の歴史・文化、社会的特性について理解を深める科目、および②地域で活動することについての理解を深める科目」である。また、その教育目標は、「①地域の固有性への理解を深め、地域への関心・愛着を養うとともに、②地域で活動することに役立つ知識を身につけ、地域貢献を行うための基礎を身につける」ことである（2018年9月11日教授会での報告資料による）。

本科目はこれまで5年間開講されており、地方公共団体・民間企業・大学教員等学識経験者からの地域の現状や課題についての講義を中心に、地域に対する基礎的理解を深めてきた。また、それぞれの基本的なビジョンや取り組み例の紹介、グループワークなどを通して、地域課題を他人事ではなく“自分事”として捉え、地域への関心・愛着を養うことを目標に行ってきた。これまでの授業計画の一覧は後掲する⁽³⁾。

1. 2. 2023年度授業の計画・運営状況

2023年度は、これまでの4年間の内容と学生の感想を踏まえ、次頁の授業計画で行った。履修登録者は、1年生から4年生までの36名である。

授業準備・運営については、担当教員が分担して行った。講師とのやり取り、起案書の作成、依頼文書の送付、配布資料の準備、事前・事後課題提出のためのGoogle クラウドルームへの課題のアップロード、講師へのフィードバック等を行った。

講師については、以下の通りであるが、第8回～第12回の5回は、松山市との連携に関する協定（2015年度に締結）に基づき松山市総合政策部企画戦略課を窓口し、講師派遣を依頼し、9月に松山市役所での全体打ち合わせを行った。その後の各回の担当者との打ち合わせは、メールを通して個別にやり取りを行った。他の回については、担当教員と講師やゲストとの間で、メールや電話を通してのやり取りや対面での打ち合わせを行った。

なお、2021年度と2022年度については、新型コロナウイルス感染予防の観点から、オンラインでの実施になった回もあるが、マスク着用や座席指定、授業終了後の消毒の徹底などではほぼ対面での授業であった。

2023年度授業計画

講義日	回	大学のシラバスでのタイトル
9月25日	第1回	イントロダクション（授業の概要説明、受講生の意識調査） ～女子教育と東雲学園の歴史～
10月2日	第2回	まつやまと文化①～県外・海外からみたまつやまの文化・暮らし～ ゲスト：高橋沙織氏（松山東雲女子大学 OG）
10月16日	第3回	まつやまと文化②～俳句の文化：松山市の史跡庭園「庚申庵」に学ぶ～ （NPO 法人庚申倶楽部理事長・松山東雲女子大学名誉教授 松井忍氏）
10月23日	第4回	まつやまと国際化①～愛媛・まつやまに暮らす外国人との共生や支援を考える～ （東京大学名誉教授 向井留実子氏）
10月30日	第5回	まつやまと国際化②～愛媛・まつやまと世界をつなぐ地域商社～ （愛媛エフエーゼット株式会社取締役 アイロット事業部長 鶴村幸弘氏）
11月6日	第6回	遍路文化体験 ～繁多寺～
11月15日	第7回	遍路文化について
11月20日	第8回	まつやまの地域特性①～まつやまの産業と事業所～ （松山市産業経済部地域経済課主査 山内陽平氏）
11月27日	第9回	まつやまの地域特性②～まつやまの「まちづくり」～（花園町商店街見学） （松山市都市整備部都市・交通計画課 主任 岡田直大氏）
12月4日	第10回	まつやまの地域特性③～古くて新しい道後温泉～（道後温泉付近見学） （松山市産業経済部道後温泉事務所 主任 清水敏樹氏、主事 原田恭子氏）
12月11日	第11回	まつやまの地域特性④～松山圏域の観光産業・観光資源～ （松山市産業経済部観光・国際交流課 副主幹 曾根崇文氏）
12月18日	第12回	まつやまの地域特性⑤～「ことば」を生かしたまちづくり～ （松山市坂の上の雲まちづくり部文化・ことば課 副主幹 梶田晋一郎氏、主事 森貞美里氏）
2024年 1月15日	第13回	まつやまで暮らす①～愛媛・まつやま×食～ （株式会社ホテル葛城副社長・総料理長、愛媛県調理師会会長 遠藤一義氏）
1月22日	第14回	まつやまで暮らす②～自然環境とまつやま～ （株式会社ハレックス前代表取締役社長 越智正昭氏）
1月29日	第15回	まつやまで暮らす③～まつやま×スポーツ （株式会社魅せるぜえひめ愛代表取締役 田中エリナ氏）

2. 「まつやま学」の成果と課題

本科目は、専門科目の授業と異なり、ほぼ毎回学外の講師やゲストを招いている。そのため、様々な取り組みやその背景にある課題の最新情報を学ぶことができる。また、それぞれの取り組みの第一線で活躍する社会人を通しての学びは、学生に大きな刺激となっている。それは、授業改善アンケートにおいても高評価を得ていることからわかる。

以下に、2022年度の全15回を受講しての最終レポートによる学生の感想と、2022年度及び2023年度学外講師へのフィードバック時に得られたコメントの中からいくつかを紹介する。

2.1. 学生の感想

学生（2022年度）の最終的な感想からは、「まつやま」に対する知識の広がり・深まり、まつやま及び自分の地元への関心、地域貢献への意欲が生まれ、物事に対する視野の広がりも生まれている。以下にそれぞれに分けて示す。

【知識の広がり・深まり】

- ①松山に対する知識の幅を広げることができた。グループワークもあり、私にはない考えや発想をグループのメンバーから得られた点は良かった。実際に体験してみたり、講師の方から頂いた言葉など自分にとって上向きになれるような講義内容もあり、とても良い学びをすることができた。（2年生）
- ②私は、2年前から松山で一人暮らしを始めたばかりで、松山のことをよく知らなかった。しかし、授業を通して、松山の観光や街づくり、暮らしなどに関わる話を聴くことで、松山について理解を深めることができた。また、松山の魅力を感じ、松山についてもっと知りたいと感じた。（2年生）

【まつやまへの関心】

- ①改めて地元、まつやまの良さを知ることができた。地元を知り、たくさんの思い出が詰まったこの地域の良いところを、もっと考えて魅力を発信していきたいと思う。また、もっと地域文化、地域の魅力について伝えていけるように、地元のお祭りに参加したり、伝統の料理を家で作ってみたりするなどして実践もしてみようと思う。地元の良さを全国、世界へ発信し、注目され、来県者や、移住者が増えることを願っている。そうなることで、観光収入UP、税収UP、地域活性化につながるのではないかと考えた。（3年生）
- ②今後はこのまつやま学で学んできた内容を、愛媛県松山市にまだ来たことがない人向けに情報発信していきたい。松山の魅力をさらに発見できるように、普段の生活から松山という町に関心を持ちたい。（2年生）

【自分の地元への関心】

松山だけでなく、自分の地元についても知りたいと感じたので、地元の魅力も再発見できればと

思う。(2年生)

【地域貢献への意欲】

- ①全ての授業で共通するのは、この愛媛・松山を一人一人が愛し、この良さを広めていきたいという思いだ。市役所の方やアナウンサー、スポーツ関係者の方、一人一人職種は全く違う。だが、思っていることは同じであり、そこからそれぞれの職種を活かして、良さを伝える活動をしている。それはとても素晴らしいことであり、自分自身、何ができるか考えるきっかけになった。今後も人々が安心して住み続けるまちづくりを実現できるように自分自身できることはしていきたいと思う。(1年生)
- ②松山の良さを改めて知ることができた。その中に地域の団体で取り組んでいる方々の支えがあり、今日も暮らしていることが分かり、これから若い世代の私達が地域の文化や魅力を他県にも発信していくことが地域課題に関わり貢献していくことのひとつだと思った。中でも、食を伝えることに関心を持った。郷土料理を残し受け継ぐためにも発信していくことも大切だと思った。(1年生)

【視野の広がり】

- ①まつやま学を受講していなければ、松山の素晴らしい人と出会うことや新たな分野の発見をすることができていなかった。今まで自分が興味のある分野のみを調べていたが、授業を通してまだ知らなかった新たな分野を知ることができ毎授業ワクワクしながら受講していた。また、私たちの知らないところでプロジェクトが進められていたり、その企業・団体からみる松山はそれぞれ異なっていたり面白い発見がいくつもあった。(2年生)
- ②松山の様々な部分をいつもとは異なる視点で見たり考えたりすることができた。これからも広い視野と柔軟な考えをもち、様々な視点から松山を見て、松山の魅力をたくさん発見していきたい。(2年生)

2.2. 講師の感想

毎回の授業では、事後課題の一つとして、授業の感想や講師からの質問に対する回答などを学生から提出してもらい、講師にフィードバックしている。講師からは、以下のように、若い世代の意見を聴くことができたことを評価するコメントが多い。授業に学外講師を招き、講師からの講義を通して学生たちが考えたことや感想をフィードバックするということは、講師だけでなく各企業・団体にとっても普段接することのない学生たちの生の声を知る機会となっている。

以下に、講師のコメントを筆者が編集した形で紹介する。

- ・少しでも松山市のことを知って興味をもって考えるきっかけとなったら嬉しい。講義の担当は初めてだったが、学生の意見は大変参考になった。
- ・学生から学ぶことも多く、大変貴重な時間だった。アンケートから、学生が松山の魅力や観光の重要性などに気づき、また、講義に真剣に取り組んでいたのがわかった。

- ・アンケートでは幅広いジャンルで、若い世代の感覚の意見があり、貴重なアイデアとして、大切にしたいと思う。
- ・学生に興味を持ってもらえたようで、嬉しく思う。いろいろなアイデアも関係者とも共有したい。
- ・普段聞くことができない若い世代の方の貴重な意見であり、早速課内に共有したい。
- ・学生の感想など、大変、勉強に、参考になる。社内の若いスタッフにも共有し、今後の企画の参考とさせていただきたい。
- ・取組について伝えることができ、大変良い機会となった。興味をもってくれて大変嬉しく思う。取組を今後さらに広めていけるよう、取り組んでいきたいと思う。
- ・ワークシートの中身が、比較的、簡単に実現できそうなものもあり、色々な意見があって大変興味深かった。これからの持続可能性のためには若い方たちの意見がこれまで以上に重要になってくる。

以上のように、学生は本科目を通して、「まつやま」という地域に関する知識が増え、関心が沸き、自分の地元への関心も呼び起されている。そして、講師の姿から、仕事に対する誇りや熱意を感じ取り、自分もできることをして地域貢献をしたいという気持ちを持つようになっている。一方、講師も、学生たちの感想や質問の回答から、学生の新しい視点やアイデアを知る機会となっていることがうかがえる。

しかし、学生が受講前に「まつやま」についてどのような事前知識を持っているかという点はこれまで把握できておらず、愛媛県内であっても学生の出身地域によってどの程度偏りが出るのか、授業を通してどのような知識を得ているのか等について定量的に明らかにすることはできていなかった。これらを解明することにより、本科目の内容を設計するうえでの必要な情報が増え、科目全体をより効果的なものにしていくことが期待される。

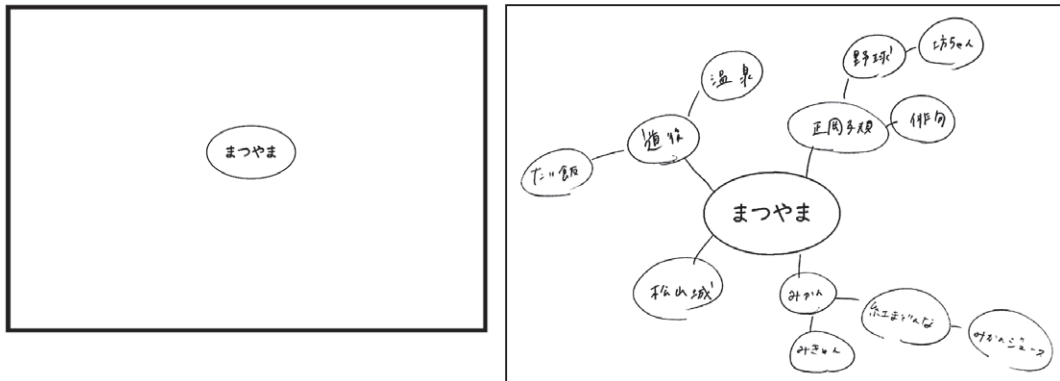
3. 学生の地域に関する事前知識

先に掲げた本科目の配置されている「社会と共に学ぶ」という科目群の教育目標に照らし合わせて見ると、「社会と共に学ぶ」科目群は「①松山、日本という固有の地域の歴史・文化、社会的特性について理解を深める科目、および②地域で活動することについての理解を深める科目」である。また、その教育目標は、「①地域の固有性への理解を深め、地域への関心・愛着を養うとともに、②地域で活動することに役立つ知識を身につけ、地域貢献を行うための基礎を身につける」というものである。本科目において、これらの概要・教育目標を高い水準で達成するためには、地域の固有性、つまり「まつやま」に関する学生の事前知識がどの程度あり、それが授業によってどのように広がっていくかを把握・検証する必要があると考えられる。そこで本論文では、学生の事前知識の量と内容をイメージマップによって収集することを試みた。

3. 1. 研究の方法

本節では2023年度の「まつやま学」受講者に対して第1回目（欠席者については2回目）の授業後に実施したアンケート調査とイメージマップのテキスト分析の結果を述べていく。調査の目的と方法を口頭で説明し、同意を得られた学生に参加してもらった。回答数は36であった（履修辞退者を含む）。

イメージマップとは思考法のひとつで、俗にマインドマップと呼ばれるものに近い。中心に書かれたキーワードから連想する言葉を書き出していくもので、学習者が持つ体験・経験・知識・感情の情報を図示することにより知識の獲得状況を捉えようとするものである。三宅（2000）はイメージマップにおいて、中心に書かれた事柄について連想した言葉はその事柄に対して自分が持っているイメージを強く反映しており、その次以降に連想する言葉によって自分自身でも捉えられていなかったその事柄に対する考えや態度を客観化することができるとしている。また、イメージマップテストの分析の観点・指標としては、流暢性（総語数）、拡散性（言葉の種類）、構造的性（一次連想と二次連想の関連）、初発語（一次連想語）があるという。これらを参考に、イメージマップの作成を受講生に依頼し、「まつやまと聞いて思い浮かぶこと」について下記の図に10分間で自由に書き出すよう指示した。



図表1 イメージマップ（左：記入前，右：記入後の例）

分析にあたっては、KH Coder を使用した。KH Coder は計量テキスト分析のためのフリーソフトであり、計量テキスト分析では質的方法（内容分析）と量的方法（テキストマイニング）の要素を往還して知見の算出を目指す（樋口2014）が、本分析では後者の機能を重視して用いた。

分析の下準備として、収集したイメージマップ（以下、プレマップ）に書かれた単語をテキストデータ化した。その際、「まつやま」と直接線でつながれた単語を初発語として重視し、その語に続く単語を1セルに収めた。つまり、図表1の例では4セル（正岡子規、俳句、野球、坊っちゃん／みかん、みきゃん、紅まどんな、みかんジュース／松山城／道後、温泉、鯛めし）となる⁽⁴⁾。また、単語の表記揺れについてはこちらで修正を施し、固有名詞については強制抽出語として設定

した。その結果、作成したデータベースは、延べ語数 1070 語、異なり語数（語の種類）280 語であり、うち分析対象となった自立語はそれぞれ 649 語、235 語であった。

アンケート調査では、学生の出身と居住している地域、「まつやま」についての学習歴、定住志向（まつやまに住みたい／住み続けたい）について尋ねた。また、上記のイメージマップ調査で得られた記入単語数もデータに含めた。分析にあたっては SPSS Statistics Ver.20 を使用した。

3. 2. 結果

（1）学生の地域に対する認識と学習経験

まずアンケート調査を集計した結果、以下のような分布になっていた（図表 2）。受講生は 3 学科・専攻にまたがっており、約 3 分の 1 が短大生である。出身地域は愛媛県の中予地方が大半を占めており、東予地方・南予地方・県外出身者も含め全員が中予地方に在住している。まつやまについての学習歴があるのは約 3 分の 2 で、まつやまへの定住志向については肯定的回答が 7 割以上を占めた。

図表 2 基本統計量

項目名	学科・専攻	学年	出身地域	居住地	学習歴	定住志向	単語数
変数の内容	心理子ども・心理福祉	12	1 中予	24 中予	36 あり	20 全くそう思わない	1 平均 14.64
	心理子ども・子ども	13	2 東予	3 東予	0 なし	11 そう思わない	9 標準偏差 6.875
	現代ビジネス	11	3 南予	4 南予	0 わからない	5 そう思う	21 最小 5
		4	3 県外	5 県外	0	5 強くそう思う	5 最大 40
N		36	36	36	36	36	36

どのような学生が事前知識（≡まつやまにまつわる単語・イメージ）を豊富に持っているのだろうか。ここでは、プレマップへの記入単語数を従属変数、学年・出身地域（中予地方か否か）・学習歴の有無・定住志向を従属変数とする重回帰分析を行った（図表 3）。

図表 3 単語数の規定要因（重回帰分析）

	回帰係数	標準化係数
（定数）	10.927	*
学年	1.621	0.258
中予ダミー	-7.449	-0.518 *
学習歴ダミー	6.994	0.513 *
定住志向	0.515	0.052
決定係数	0.256	
調整済み決定係数	0.170	
回帰のF検定	F=2.797, p<0.05	
N	36	

* p<0.05

分析の結果、中予ダミー（中予=1、それ以外=0）と学習歴ダミー（あり=1、なし・わからない=0）が有意となった。記入している単語が中予地方出身者であれば約 7 個減り、学習歴があると約 7 個増えるという結果になった⁽⁵⁾。結果の解釈は難しいが、まつやまに関する学習をしたと認識できるのはすなわち具体的な事象が思い浮かぶということであり、中予地方出身者の多くは

普段の生活の場であるがゆえにまつやまの特徴を見出すことが難しいのかもしれない。

(2) 学生の事前知識

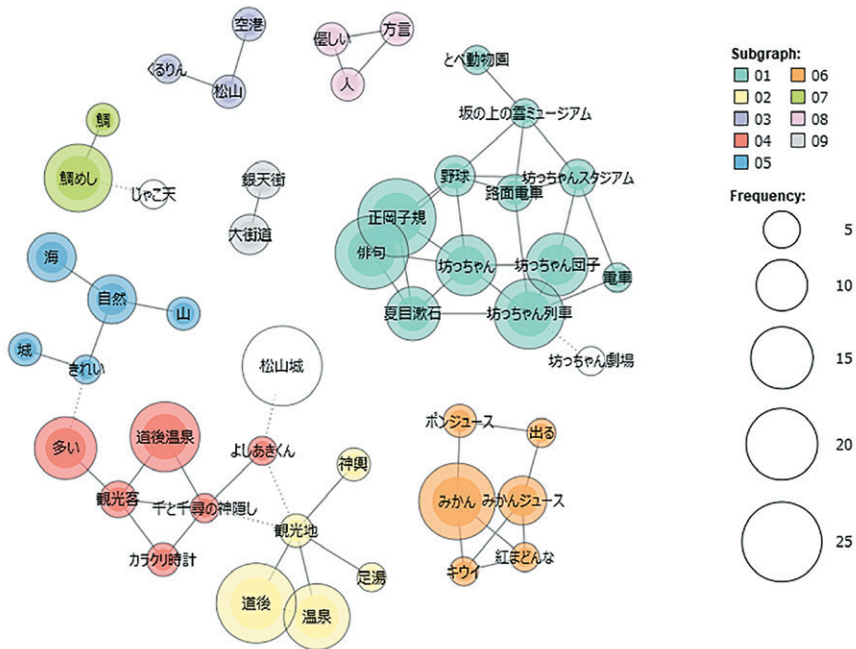
次にプレマップについて集計した結果、1人あたりの平均記入数は14.6個となった。ただし最も少ない者で5、多い者で40と幅があった。

まず、プレマップ中に頻出する語を確認する。頻出語として抽出された上位の単語は次のようになった（カッコ内は出現回数。紙面の都合上5回以上登場したもののみを示す）。

松山城（25）、道後（25）、正岡子規（24）、みかん（23）、俳句（21）、
道後温泉（19）、坊っちゃん列車（19）、鯛めし（18）、温泉（17）、
多い（15）、坊っちゃん団子（15）、坊っちゃん（14）、夏目漱石（11）、
みかんジュース（9）、海（9）、自然（9）、大街道（6）、野球（6）、
観光客（5）、銀天街（5）、坊っちゃんスタジアム（5）、路面電車（5）

これを見ると、回答者の約3分の2が「松山城」「道後」「正岡子規」「みかん」と回答している。その他、約半数が回答している「俳句」「道後温泉」「坊っちゃん列車」「鯛めし」「温泉」までが学生が抱くまつやまの主なイメージだと言えるだろう。全体としては文学、温泉観光、特産物（みかん・鯛）関連の語が多く見受けられる。また、上位語のなかには、「坊っちゃん」が複合名詞として多く登場している。これはまつやまが夏目漱石著作の『坊っちゃん』の舞台であることに由来している。坊っちゃん列車（2001年より伊予鉄道が市内線で運行しているかつての蒸気機関車を模したレプリカ列車）、坊っちゃん団子（抹茶・白・小豆の3色の餡に餅が入った団子。『坊っちゃん』内に団子が登場することから小説の表題にちなんで命名されたと言われている）、坊っちゃんスタジアム（松山中央公園野球場の愛称）、上記にはないが坊っちゃん劇場（東温市にある劇場）等、『坊っちゃん』がまつやま市民にとってなじみ深いものであることがうかがわれる。

次に、より正確にどのように単語同士が連想されていくのかを共起ネットワークを用いて可視化する。ここでは頻出する語のうち出現パターンが似通っているものが線でつながれ、比較的強くお互いに結び付いているとみなされた部分がサブグラフとしてグループ化される。今回の結果を示したものが図表4である。なお、円の面積は語の出現回数の多さを表している。



図表 4 「まつやま」に関する頻出語の共起ネットワーク⁽⁶⁾

これを見ると、9つのグループに分けられており、それぞれ以下のようにラベルづけできると考えられる⁽⁷⁾。

1. 文学と観光（坊っちゃん、坊っちゃん列車、野球、坊っちゃんスタジアム、正岡子規、夏目漱石、路面電車、坂の上の雲ミュージアム、俳句、坊っちゃん団子、電車、とべ動物園）
2. 道後と観光①（観光地、道後、温泉、足湯、神輿）
3. 地方都市（松山、空港、くるりん）
4. 道後と観光②（道後温泉、千と千尋の神隠し、観光客、よしあきくん、道後温泉、カラクリ時計、多い）
5. 自然（自然、きれい、海、山、城）
6. 柑橘類（みかん、みかんジュース、紅まどんな、キウイ、ポンジュース、出る）
7. タイ（鯛めし、鯛）
8. 人間（方言、人、優しい）
9. 繁華街（大街道、銀天街）

ここでは、全体の頻出語でも多かった単語が含まれるグループにおいて共起している詳細に言及したい。グループ1では正岡子規と夏目漱石が核となっている。交友関係があり、一時期同居していたかれらが俳句と小説という日本近代文学に大きな足跡を残したということを、今回の対象者の

多くを占めた中予地方出身者やまつやまに関する学習歴があった学生は知っていたのではないかと考えられる。中予地方の学校教育における地域学習や社会科見学で取り上げられる事項との関連の検討が望まれる。グループ2・4は分かれてしまったが、内容としてはどちらも道後温泉に関するものである。グループ6以外の残り5つについては円の面積が小さくつながっている単語数も少ないことから、知識として意識されにくく広がりも少ないトピックであると考えられる。なお、頻出語だった松山城はどこのグループにも属しておらず、単独で想起される単語であると推測される。自然（グループ5）と人間（グループ8）は別として、全体的に主に松山市内の観光資源に学生の知識が偏っていることが示唆される。

4. おわりに

「まつやま学」は、地方公共団体・民間企業・大学教員等学識経験者による地域の現状や課題についての講義を中心とした大学における地域協働教育であり、学生たちの地域に対する基礎的理解を深め、地域社会で生きていくための基盤と地域貢献への当事者意識を育むことに寄与してきた。本論文はその成果の一部をまとめたものであり、学生に関しては知識の広がりや深まり、出身地域への関心と地域貢献への意欲の向上が見られ、地域にとっても若い世代の生の声を知る機会として相互に貢献していることが改めて示された。さらに履修登録者への調査により、松山圏域に関する学習歴があるほど、また地元出身者以外の学生ほど事前知識が豊富であること、一方でその知識は松山市内の観光資源（文学、温泉、特産物）に偏っていることが明らかになった。

本研究の課題と展望は次の通りである。まず、まつやま学を受講し終えた学生の認識がどのように変化しているかについて定量的な把握をすることが課題である。つまり、ポストマップの作成とその分析が待たれるが、これについては別稿で論じることを予定している。その際、流暢性・拡散性・構造的性・初発語の観点から学生の知識獲得とその要因について考察することが求められる。また、その結果を受けて、授業デザインをどう改善していくかが次なる課題として浮かび上がってくる。その際、本科目が高大連携科目であり、高校3年生も受講できる科目であることにも留意が必要である。2022年度には2名の高校3年生が受講したが、まだ理解が難しい用語や知識などがあった。高大連携という観点からは、授業内だけではなく高校との連携の在り方も今後検討課題になると思われる。

注

(1) 1・2節を西村、3・4節を山口が執筆した。

(2) 「2015～2019年度COC+事業報告書」（松山東雲女子大学・短期大学COC+「地方における女性のワークライフバランス」プロジェクト、2020年3月31日）。

- (3) 2019年度からの授業計画は、次頁の表のとおりである。授業の運営はこの5年間、以下の教員が担当した。

2019年度・2020年度 永代仁（短期大学教員）・西村浩子

2021年度 西村浩子・今橋裕（短期大学教員）

2022年度・2023年度 西村浩子・山口真美

学外講師については、2019年・2020年度は主に松山市の産業・経済・まちづくりに重点を置いた計画にし、松山市役所関係者に依頼した。2021年度からは担当者の変更もあり、文化に関わる内容を追加し、松山市役所関係者に加えて愛媛県関係者、地元企業関係者、学園関係者に依頼し、内容の拡充を図って来た。

- (4) 線が分岐しているものやつながって循環しているものについては、より単語同士の距離が近いほうに属していると判断し、入力した。たとえば、図表1の右の例では、「みきゃん」と「紅まどんな」が「みかん」から分岐しているが、線が短いため「みきゃん」を先に入力している。しかし「みきゃん、紅まどんな、みかんジュース」と「紅まどんな、みきゃん、みかんジュース」では、「みかんジュース」との距離が異なってしまう。これについては入力方法の改善が必要である。
- (5) 中予ダミーと学習歴ダミーは下記の図表5からもわかる通り、関連が認められる。しかし重回帰分析において共線性の診断では問題はない（VIF=1.920 および 1.824）程度で、独立した効果があると考えられる。

図表5 出身地域と学習歴のクロス表

	ある	ない
中予(n=24)	79.2%	20.8%
中予以外(n=12)	8.3%	91.7%

χ^2 乗値=16.256, $p<0.000$

参考：まつやま学 2019年度～2022年度までの授業計画一覧

	2019・2020年度	2021年度	2022年度
第1回	イントロダクション（授業の概要説明、受講生の意識調査）	・イントロダクション（授業の概要説明、受講生の意識調査） ・女子教育と東雲学園の歴史～	・イントロダクション（授業の概要説明、受講生の意識調査） ・女子教育と東雲学園の歴史
第2回	東雲を知る①～ 女子教育と東雲学園の歴史～ （創立～女子大開学）	松山の歴史と文化① ～松山市の史跡庭園「庚申庵」 に学ぶ～	松山の文化① ～遍路の文化を知る～
第3回	東雲を知る② ～先輩女性に学ぶ。なぜ東雲で、何を東雲で。～	松山の歴史と文化② ～俳句とHAIKU～	松山の文化② ～俳句の文化：松山市の史跡庭園「庚申庵」に学ぶ～
第4回	松山を知る① ～愛媛の産業構造（地域特性を知る）～	松山の歴史と文化③ ～松山の食文化～	松山と国際化① ～愛媛・松山に暮らす外国人との共生や支援を考える～
第5回	松山を知る② ～まつやま圏域未来共創ビジョン～	松山の歴史と文化④ ～観光ビジネスと遍路～	松山と国際化② ～愛媛・松山と世界をつなぐ地域商社～ ＊オンラインでの実施
第6回	松山を知る③ 振り返り	松山の歴史と文化⑤ 振り返り	松山の地域特性① ～愛媛の産業構造（地域特性を知る）～
第7回	松山を知る④ ～松山の産業構造と地域経済～ （概要を把握）	松山を知る① ～愛媛の産業構造（地域特性を知る）～	松山の地域特性② ～松山の観光産業・観光資源～
第8回	松山を知る⑤ ～松山の産業構造と地域経済～ 観光産業・観光資源	松山を知る② ～松山の観光産業・観光資源～	松山の地域特性③ ～古くて新しい道後温泉～
第9回	松山を知る⑥ ～松山の産業構造と地域経済～ 道後温泉など	松山を知る③ ～古くて新しい道後温泉～	これまでの振り返り
第10回	松山を知る⑦ ～松山の産業構造と地域経済～ 振り返り	松山を知る④ ～松山の「まちづくり」～	松山で暮らす① ～松山の「まちづくり」～

第11回	松山で生きる① ～松山で働く～愛媛県内での就職事情	松山を知る⑤ 振り返り	松山で暮らす② ～松山の自然環境 SDG s の視点から～
第12回	松山で生きる② ～松山で働く：愛媛県外出身者から見た松山～	松山で生きる① ～メディアから見た松山～	松山で暮らす③ ～メディアから見た松山～
第13回	松山で生きる③ ～松山で暮らす：まちづくりを学ぶ	松山で生きる② ～スポーツと地域おこし～	松山で暮らす④ ～食を伝える～
第14回	松山で生きる④ ～松山で暮らす：まちづくりを考える	松山で生きる③ ～松山の自然環境 SDG s の視点から～ *オンラインでの実施	松山で暮らす⑤ ～スポーツと地域おこし～
第15回	松山で生きる⑤ 振り返り	まとめ (レポート作成のアドバイス・質問)	まとめ (レポート作成のアドバイス・質問)

(6) 共起の判定には Jaccard 係数を使用した。なお、Nodes (描画されている語の数) は 47, Edges (描画されている共起関係の数) は 62, Density (データに存在している共起関係のうち描画できている割合) は 0.057 であった。また、データに含まれている共起語は 52, 共起関係は 159 であった。

(7) 補足が必要だと思われる語について説明する。

- ・坂の上の雲ミュージアム：司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』の主人公たちがいずれも松山出身であることから 2007 年に開館した博物館。登場人物や明治時代に関する展示やまちづくりに関するさまざまな活動が行われている。
- ・神輿：毎年 10 月に行われる松山道後秋祭りにおいて、町内を練り歩いたあと、激しく神輿をぶつけ合う「鉢合わせ」を行うことから、喧嘩神輿と呼ばれている。
- ・くるりん：いよてつ高島屋の屋上にある観覧車。
- ・よしあきくん：松山城のマスコットキャラクター。初代城主の加藤嘉明 (1563～1631) にちなんで命名された。
- ・カラクリ時計：道後温泉駅前にある時計。1 時間ごとに『坊っちゃん』の登場人物のしかけが音楽とともに出てくる。
- ・紅まどんな：品種名は愛媛県試第 28 号で、愛媛県独自の品種。「樹になるゼリー」と称されることもある。名前の由来は『坊っちゃん』に登場するマドンナ。
- ・出る：松山空港や観光物産館にあるみかんジュース蛇口から連想されたと考えられる。

参考文献

樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版。

三宅正太郎, 2000, 「教育評価道具としてのイメージマッピングテスト (IMT) について」『日本科学教育学会研究会研究報告』15 巻 3 号, pp.39-44.

謝辞

本科目の実施にあたっては、以下の方々のご理解とご協力をいただきました。ここに記して、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。(掲載は登壇順)

〈2019 年度講師・ゲスト〉

星企画株式会社コープ営業推進部 松浦美智氏, 松山市産業経済部地域経済課主任 坂本亮太氏, 同部観光・国際交流課主幹 佐田修一郎氏, 同部道後温泉事務所主幹 片岡泰広氏, 同部道後温泉事務所主事 岡田直大氏, 松山市都市整備部都市・交通計画課主幹 兵藤一馬氏, 同部松山駅周辺整備課主幹 黒川茂氏, 松山市総合政策部シティプロモーション推進課主事 大森俊介氏, 愛媛ふるさと暮らし応援センターえひめ移住コンシェルジュ 板垣義男氏, 佐藤久美子氏, 松山東雲女子大学・短期大学キャリア支援課課長 徳本浩二氏

〈2020 年度講師・ゲスト〉

星企画株式会社コープ営業推進部 松浦美智氏, 松山市産業経済部地域経済課主任 坂本亮太氏, 同部観光・国際交流課主幹

佐田修一郎氏、同部道後温泉事務所主幹 片岡泰広氏、同部道後温泉事務所主事 岡田直大氏、松山市都市整備部都市・交通計画課主幹 兵藤一馬氏、同部松山駅周辺整備課主幹 黒川茂氏、松山市総合政策部シティプロモーション推進課主事 大森俊介氏、愛媛ふるさと暮らし応援センターえひめ移住コンシェルジュ 板垣義男氏、松山東雲女子大学・短期大学キャリア支援課課長 徳本浩二氏

〈2021 年度講師・ゲスト〉

松山東雲女子大学名誉教授・NPO 法人庚申倶楽部理事長 松井忍氏、松山東雲女子大学 蔵前知美氏、愛媛県大阪事務所所長 鶴村幸弘氏、松山市産業経済部地域経済課主任 富岡宏行氏、松山市産業経済部観光・国際交流課主査 大隅哲平氏、松山市産業経済部道後温泉事務所副主幹 越智文子氏、同主査 徳岡秀俊氏、松山市都市整備部都市・交通計画課主幹 柚山知範氏、同部松山駅周辺整備課副主幹 神野誠氏、松山市総合政策部企画戦略課 田内長宏氏、南海放送「NEWS CH.4」キャスター 清家タ貴氏、愛媛県民球団株式会社社長 薬師神権祐氏、愛媛マングリンパイレーツ 河野翔太投手・西原大智投手・矢野泰二郎捕手

〈2022 年度講師・ゲスト〉

松山東雲女子大学名誉教授・NPO 法人庚申倶楽部理事長 松井忍氏、東京大学名誉教授 向井留実子氏、愛媛エフエーゼット株式会社取締役 アイロット事業部長 鶴村幸弘氏、松山市産業経済部地域経済課主任 遠山東加氏、松山市産業経済部観光・国際交流課主任 大堀祐輝氏、松山市産業経済部道後温泉事務所主査 徳岡秀俊氏、松山市都市整備部都市・交通計画課技師 岡田直大氏、松山駅周辺整備課主幹 神野誠氏、松山市総合政策部企画戦略課副主幹 田内長宏氏、株式会社あいテレビアナウンサー 平繁かなえ氏、株式会社ホテル葛城副社長・総料理長 愛媛県調理師会副会長 遠藤一義氏、愛媛マングリンパイレーツ マネージャー 萩原拓光氏、山崎雅史外野手、矢野泰二郎捕手、星企画株式会社コープ営業推進部 松浦美智氏

〈2023 年度講師・ゲスト〉

高橋沙織氏（松山東雲女子大学 OG）、松山東雲女子大学名誉教授・NPO 法人庚申倶楽部理事長 松井忍氏、東京大学名誉教授 向井留実子氏、愛媛エフエーゼット株式会社取締役 アイロット事業部長 鶴村幸弘氏、松山市産業経済部地域経済課主査 山内陽平氏、松山市都市整備部都市・交通計画課主任 岡田直大氏、松山市産業経済部道後温泉事務所主任 清水敏樹氏、主事 原田恭子氏、松山市産業経済部観光・国際交流課副主幹 曾根崇文氏、松山市坂の上の雲まちづくり部文化・ことば課副主幹 梶田晋一郎氏、主事 森貞美里氏、株式会社ホテル葛城副社長・総料理長 愛媛県調理師会会長 遠藤一義氏、株式会社ハレックス前代表取締役社長 越智正昭氏、株式会社魅せるぜえひめ愛代表取締役 田中エリナ氏